第８回　「諏訪形誌を歩くーウォーキングイベント」資料

諏訪形入門

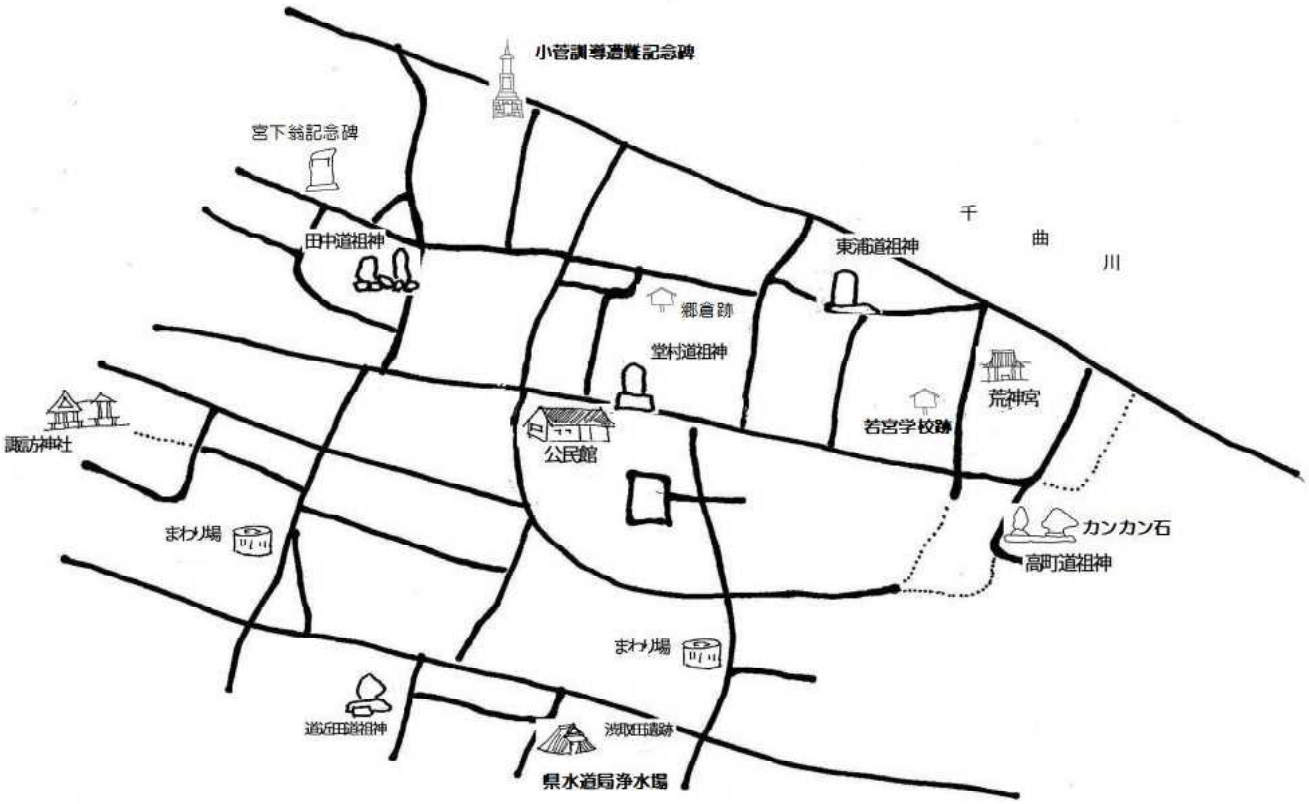
今回は諏訪形自治会、諏訪形誌活用委員会共催のウォーキングイベントにご参加いただきありがとうございます。
諏訪形誌活用委員会では、『諏訪形誌』を有効に活用していくために、一昨年から『諏訪形誌web版』の「諏訪形誌を歩く」をベースにしたウォーキングイベントを開催しています。今回は第８回目の開催となります。
今回は、諏訪形自治会の交流親睦会にあわせて、今までこの企画にご参加いただけなかった皆さんや、他の地域などから新たに諏訪形にお見えになって諏訪形についていろいろお知りになりたい方、これから諏訪形についていろいろ知りたいという方などを主な対象に、「**諏訪形入門**」として諏訪形の名所めぐりを企画しました。初夏の半日、参加者の皆さんと交流しながら気持ちよく歩いていただけたら幸いです。

本資料は、イベント当日散策するルートに沿って、諏訪形の見所を紹介させていただいています。資料の記載内容は基本的には『諏訪形誌』からの引用で、標題の後に『諏訪形誌』の掲載ページを示しました。本イベント後、もう一度『諏訪形誌』を手にとっていただけるとうれしいです。
なお、諏訪形散策に先立って、北沢伴康諏訪形誌活用委員会顧問に諏訪形の歴史についての講演をお願いしています。歩き回るのは難しいという皆さんは、講演だけでもご参加いただけます。

また、諏訪形誌活用委員会では、『諏訪形誌』刊行後にわかったことや動画資料、写真資料などを中心に、インターネット上に『諏訪形誌web版』を公開しています。こちらもご覧いただけたら幸いです。URLはhttps://suwagata.ueda-common.net/です。

１．諏訪形公民館（北沢伴康諏訪形誌活用委員会顧問の講演　演題：諏訪形の歴史）

２．ウォーキングイベント　（現地解説：諏訪形誌活用委員会　窪田善雄委員）
諏訪形公民館→堂村道祖神→カンカン石・高町道祖神　（公民館から約３５０ｍ）
→若宮学校跡　→　荒神宮　→　東浦道祖神　→　郷倉跡　（カンカン石から約５００ｍ）
→気抜きのある農家　→　小菅訓導遭難紀念碑→宮下惇徳翁頌徳碑（郷倉跡から約４５０ｍ）
→田中道祖神　→　諏訪神社　→　公民館　（頌徳碑から約５００ｍ）



２０２３年　５月　２８日　（日）　　諏訪形自治会交流親睦会

主催：諏訪形自治会・諏訪形誌活用委員会

(1) 道祖神（『諏訪形誌』　２５８ページ）

道祖神は、「猿田彦大神」をはじめとする道案内の神とされ「塞の神」とも呼ばれています。また、村落への邪霊の侵入を防ぎ、旅人の安全を守る神として、古来から庶民の信仰の対象となっていました。江戸時代以後は、その形状から良縁、安産、夫婦円満、子どもを守る神として、多岐にわたって信仰されてきています。またその多くは、祀られている場所が村境となっています。諏訪形では、概ね村の東西南北にあたる地籍に立てられています。諏訪形にある道祖神はいずれも、建立年は不明です

〇東　通称カンカン石の隣　　〇西　北田中と辻田の境
〇南　堂村公民館北側　　〇北　東浦と北浦の境

これらのほか、中村と須川地区にも、それぞれ一基ずつの道祖神があります。また、諏訪形の住居地域が広がったため、昭和五十八年（一九八三）には、深町地籍にも新たな道祖神が建てられました。平成二十九年（二〇一七）、カンカン石の隣道祖神前の道路を拡幅する工事が行われた際、現在の道祖神の下から塔身（高さ一・〇五メートル、幅四五センチメートル）が真ん中から二つに割れた道祖神が出土しました。そこには文政十丁亥（一八二七）二月八日高町と線刻されていました。この年はカンカン石建立の十年後にあたります。また、同所から小型の五輪塔と思われる「火輪」も出土しました。これらが何を意味しているのかは不明ですが、埋め戻されました。

『諏訪形誌』では、この記述に続いて、「道祖神祭」の様子なども紹介されています。

徳本の「名号碑」 俗称カンカン石（『諏訪形誌』　２８２ページ）

文化十四年（一八一七）の銘のある独特の字体で彫られた「南無阿弥陀仏」の石碑が法泉海道と道又木地籍の境に建てられています。

この石碑は徳本上人（一七八五～一八一六）という浄土宗の僧侶が、文化三年（一八〇六）の春から秋にかけて信濃国へ教えを説いて歩いた際、諏訪形の地に立ち寄って説法をしたことの証として建てられたものです。

石碑の裏面には「願主　西心」「世話人栁澤松達・荒井政吉村中」などと彫られています。僧籍のある西心という人の呼びかけに応じて世話人の二人が中心となって浄財を集め、碑を建立したものと思われます。

石材は自然石で、高さ一・五メートル、幅一・六メートル、やや菱形で厚さも薄く、叩けばカンカンと音がするので、いつしか「カンカン石」と呼ばれるようになって親しまれてきました。

平成二十九年（二〇一七）五月、カンカン石周辺の道路拡幅工事にあわせて名号碑建立二〇〇年の記念祭が行われました。

徳本上人の名号碑については、『諏訪形誌』出版後にもいろいろなことがわかっています。くわしくは『諏訪形誌web版』をご覧下さい。

初等教育の始まり（『諏訪形誌』　７５ページ）

江戸時代、庶民の子どもたちがお寺などで読み書きや算盤などを教えてもらう施設を「寺子屋」といいました。やがて、江戸時代を通じて寺子屋はお寺から民家に移り、ほとんどの村々に寺子屋が普及していきました。手習いをする期間には一定のきまりはなく、主に農閑期に集中していました。
寛政年間（一七八九～一八〇〇）に田子栄三が開いた御所村の「松恵堂」三代目の田子温廉の一番弟子だった諏訪形出身の宮下理兵衛は、明治初年から同六年（一八七三）にかけて諏訪形村内に寺子屋を開き、五十余人の子どもたちを教えました。

諏訪形には、次の寺子屋があったことが記録に残っています。　　（表は省略）

明治五年（一八七二）八月、明治新政府によって、すべての子どもは六歳から学校に通うことを定めた「学制」が発布されました。これによって寺子屋は廃止され、全国に小学校が設置されていきました。翌明治六年（一八七三）には、学区制に基づいて各村に小学校を一校ずつ建設することが義務づけられました。この制度では学校の建設費用や人件費などの運営資金は地域住民の負担とされました。また、子どもたちが就学することで、農作業などの働き手を失うことにもなり、地域住民にとってかなり負担が重いものでもありました。

城下地区では明治六年（一八七三）、御所村の祥雲寺に「亮功学校」が設けられ、中之条村、御所村、諏訪形村、小牧村の子どもたちが通うようになりました。亮功学校が開校した当時、ここに通学した子どもの数は、男子九四人、女子六〇人、合わせて一五四人でした。しかし、学校へ行けなかった子どもも六三人いて、就学率はおよそ七〇パーセントでした。

荒神宮（参上神社）（『諏訪形誌』　２７１ページ）

荒神宮の祭神は、天照大神の弟神にあたる建速須佐乃雄命です。また、合殿神はその孫神に当たる興津比古命、興津比売命です。ともに火の神、竈神として、古くから信仰を集めてきた神々です。
荒神宮の創建については定かではありません。現在の社殿は文化八年（一八一一）に焼失した後、文久三年（一八六三）に再建されたものです。焼失前の社殿については、宝永三年（一七〇六）の『宝永の差出帳』に「荒神堂」という記録があることから、お堂のような建物であったと考えられますが、詳しいことはわかりません。

治承四年（一一八〇）、木曽に隠れ住んでいた源義仲（木曾義仲）は、木曽から佐久・小県方面に進出して、丸子の依田城で平家征討の兵を挙げました。この義仲を重臣として支えたのが、中原兼遠という武将でした。兼遠は木曽に所領を持つ有力者で、彼の妻は義仲の乳母であり、義仲の養父ともいうべき人物です。中原兼遠は、木曾義仲の軍事行動に一族をあげて加わりました。彼の子どもたちが、今井四郎兼平や巴御前であり、このことについては第三章第四節「荒神宮と今井四郎兼平」でも述べました。

さて、荒神宮に伝わる『荒神宮の由来』という文書によれば、中原兼遠の子に今井豊成という人物がいて、丸子依田城の義仲挙兵に際して荒神宮に派遣され、武運を祈願したとされています。今井豊成について詳細は不明ですが、今井四郎兼平の弟ということになるでしょう。

『荒神宮の由来』はさらに、木曾義仲敗死後、巴御前が尼となって荒神宮を訪れ、一族の者に挙兵以来の始末を物語ったと伝えています。以来、荒神宮の神職は、代々今井家が継承し、今日に至っています。このような経緯から、今井四郎兼平の碑が神宮境内に建てられたものと考えられます。
荒神宮はかつて、「三寶大荒神」と呼ばれていました。現在でも拝殿の壁面には金文字で「三寶大荒神」と書かれた扁額が掲げられています。この扁額は縦一二〇センチメートル、横八〇センチメートルとかなり大きなものです。また、明治の初めに発行された『小県郡神名帳（長野県歴史館所蔵）』にも「三寶大荒神」の名称が使われています。明治元年（一八六八）の「神仏分離令」までの、いわゆる「神仏混淆」の時代には、荒神宮はこのような名称で呼ばれていたことがわかります。

荒神宮の建物配置は、鳥居、拝殿、幣殿、本殿となっていて、本殿は覆い屋根を持ち、三つの部屋がある建物です。幣殿には、本殿の警護をするものとして、衣冠束帯姿の矢大神と左大神の随身像が置かれています。

江戸時代から、荒神宮への絵馬の奉納が盛んに行われていました。本殿覆い屋根の三面の板壁には大小の絵馬数百枚が奉納されていたようですが、長い間風雨にさらされてきたこともあって、現在、確認できるものはわずかばかりとなってしまっています。また、拝殿内に奉納された絵馬もあり、これらからは奉納者の名前が確認できます。この絵馬を見ると、奉納者は武州（埼玉県）や上州（群馬県）の人が多いことがわかります。遠くは河内（大阪府）からのものもあります。また、越後（新潟県）の糸魚川からは北前船をあしらった絵馬も奉納されていて、荒神宮と海上輸送との関係性もうかがうことができます。信州高遠藩士の妻からの奉納もあり、荒神宮は身分などに関係なく、多くの人たちから信仰されていたことがわかります。

戦前から戦中にかけて、荒神宮の春期祭には周辺の道路に出店が並び、講中の人たちや上田市内の芸者衆らも参詣に訪れておおいに賑わっていました。大晦日の「大祓い（年越祭）」には、参詣する人たちに紙で作った長さ一〇センチメートルほどの人形が渡され、これに息を吹きかけて自分の体内に住みついた邪気を取りのぞいて、神職に焚きあげてもらうという行事も行われていました。このような行事は六月三十日（夏越の大祓）にも行われていて、周辺の子どもたちはこの日が来るのをとても楽しみにしていました。（荒神宮の年中行事については省略）

荒神宮境内には上田市の文化財に指定されている五輪塔をはじめ、いろいろな石像文化財があります。本殿には竹内八十吉の手による彫刻が施されています（この彫刻については『諏訪形誌web版』の「諏訪形誌をちょっとナナメに歩く」をご参照ください）。また、多数の絵馬も奉納されています。これらについての詳細は現在調査中ですが、調査結果の一部は『諏訪形誌web版』でお読みいただけます。

また、荒神宮の歴史や今井四郎兼平の一族との関わりについてなども、新しい事実がいろいろと明らかになってきています。これについても『諏訪形誌web版』をご参照下さい。

竹内八十吉の彫刻

郷蔵の制度（『諏訪形誌』　５９ページ）

江戸時代には、村ごとに土地の所有者が領主へ差し出す年貢米の保管用の倉庫が設けられていました。この倉庫は「郷蔵」と呼ばれ、免税地となっていました。また、郷蔵は凶作に備えるための穀物などの貯蔵庫としても利用され、救済用にも貸し付けられていました。

江戸時代はじめのころの郷蔵は、庄屋など村役人の私蔵が多く利用されていました。しかし、不正が横行したため、幕府は寛政元年（一七八九）に村負担による公的な郷蔵の建造を命じ、郷蔵の管理は長百姓など、村役人にゆだねました。

「宝永の差出帳」には、諏訪形村にある萱葺きの郷蔵三軒が次のように記されています。

- 長さ六間（約一〇・八メートル）、横二間（約三・六メートル）、十二坪（約三九・六平方メートル）
- 長さ六間（約一〇・八メートル）、横二間（約三・六メートル）、十二坪（約三九・六平方メートル）
- 長さ七間（約一二・六メートル）、横二間（約三・六メートル）、十四坪（約四六・二平方メートル）

諏訪形にあった三つの郷蔵のうち、一つは建っていた場所が確認されています。その場所は諏訪形七一一番地（旧関商店南側）で、説明看板を設置してあります。また、この建物は明治以後、消防器具置場などに利用されていました

小菅訓導殉職記念碑（『諏訪形誌』　１５０ページ）

北浦地籍（諏訪形水防庫東側）の千曲川堤防沿いに、小菅武夫訓導の殉職記念碑が建立されています。この碑は、白壁づくりで、高さは避雷針部分を除いて一〇・五五メートルです。昭和四年（一九二九）四月二十四日、遠足帰りの上田市尋常高等小学校本校部（現第二中学校）の一部の生徒たちが、近道をするために中州に架かっていた仮の板橋を渡り始めました。引率の教師が注意をした矢先、ひとりの生徒が誤って水かさの増す千曲川へ転落し、流されてしまいました。これを目撃した引率の教師のひとり、小菅武夫がすぐさま救助に向かい、やっとの思いで生徒を助け同僚に託しました。しかし、小菅は疲労と雪解け水の強く冷たい水流によって岸辺にたどりつけずに水中に没してしまい、翌日、変わり果てた姿で発見されました。享年二十三歳、教師になって一か月足らずでした。

我が身を犠牲にして教え子を救ったという行為に対し、上田市をはじめ各地の多くの教育関係者、市内の新聞社三社などが中心になって広く義援金を募り、昭和五年（一九三〇）、殉職現場近くの千曲川河畔に殉職記念碑を建立して、永くこの偉業を後世に伝え、現在に至っています。

殉職記念碑の構造は基壇部を除き躯体はコンクリート、モルタル塗装洗い出しという工法で作られ、三段づくりに構築されています。初段の基壇部は高さ二・七メートル、幅二・七メートル、御影石積み、正面には武夫が昭和四年（一九二九）三月に、上田青年誌に寄稿した「本願晩鐘」の最初の部分が、銅版に刻まれ、はめ込まれています。　また、右側には建立に至った経緯が銅版で、背面には工事請負い業者二社の名前を黒御影石板に線刻したものがそれぞれはめ込まれています。

中段部分の正面には、灰黒色の石板に、東京文理科大学（現筑波大学）教授文学博士中山久四郎による、九百字にも及ぶ殉職に至った経緯を記した文章が線刻されています。上段は直径一・五八メートル、長さ三・六メートルの円筒形で、正面には一辺四〇センチメートルの正方形で灰黒色の石板六枚に、正三位勲一等学習院長荒木寅三郎が、力強い書体で「嗚呼小管訓導」と揮毫したものがはめ込まれています。

武夫の墓は上田市新町（常磐城）の向源寺にあり、墓碑の形は殉職記念碑をミニチュア化したものです。なお、小菅武夫は小県上田教育会館内の「信州上田ふるさと先人館」で紹介されています。

小菅訓導と彼の殉職記念碑についても『諏訪形誌web版』に追加記載がありますので、ご参照下さい。

宮下惇徳翁頌徳碑（『諏訪形誌』　２８２ページ）

宮下惇徳（じゅんとく）は本名明義、通称理兵衛と称し、明治時代に諏訪形など多くの地域でインフラ整備や産業振興、隣保事業、教育などの面で多大な功績を残した人です。惇徳の没後、門人たちがその徳をたたえて、「頌徳碑」を建立しました。この碑は現在、子孫にあたる宮下健宅の一角にあります。

頌徳碑は、高さ約一八〇センチメートル、幅約九〇センチメートル、厚さ約四〇センチメートルの自然石で、碑文は三百字余りの漢文で彫られています。上部の題字は、後に枢密院副議長を務めた東久世通禧が揮毫し、撰文は勅任官の辻新次が行いました。なお、東久世通禧は幕末、急進的な尊皇攘夷派の人で、佐幕派に追われて長州まで都落ちした七人の公家のうちのひとりです。明治維新後は、明治政府の外交などに腕を振いました。このような人が揮毫しているということは、宮下惇徳が明治政府の要人たちにも知られた人であったことを示しています。

宮下惇徳翁頌徳碑の碑文（全文）は『諏訪形誌web版』記載があります。

諏訪神社（『諏訪形誌』　２６８ページ）

諏訪神社は、古くから諏訪形の地に鎮座し、地域共同体の象徴として人々の協力・連携・親睦に寄与してきました。諏訪湖畔の諏訪大社が諏訪神信仰の総本社で、その末社が全国各地に創建され、軍神、農耕神、狩猟神として信仰を広げていきました。その数、大小合わせて約一万社に及びますが、私たちの諏訪神社もその一つです。

諏訪神社に祀られている神様は、「建御名方命（諏訪神）」といいます。この神について、諏訪地方では次のような神話が伝承されてきました。そもそも諏訪の地を支配してきたのは、「モレヤ」（洩矢・守矢・守屋などと表記）という土着の神でした。森の恵みを狩猟・採集で得て暮らす人々の神で、諏訪の御柱の起源もこの神にあるとされます。そこに外から建御名方命が現れ、モレヤを制圧したというのです。この神話は、狩猟・採集を主とする縄文文化が、稲作農耕を主とする弥生文化に転換していく現象を反映していると考えられています。

その一方、建御名方命については、『古事記』に以下の物語が語られています。建御名方命は、「大国主命」（大黒様）の次男です。天上の支配者「天照大神」が、地上の支配者「大国主命」に国を譲れと迫ったとき、この要求にあくまで反対したのが建御名方命でした。しかし、結局敗れて諏訪まで逃げたそうです。以上の「国譲り神話」は、大和政権が地方を制圧していく歴史が反映したものと考えられます。諏訪神は、それに最後まであらがったわけで、大和政権の侵攻に抵抗しようとする地方勢力の気概が感じられます。このように、建御名方命は、縄文から弥生への転換、そして大和政権の拡大という二つの重大な出来事を反映する特異な存在といえましょう。

さて、諏訪形の諏訪神社がいつ創建されたのか、残念ながら分かっていません。律令体制によって信濃国に設置された小県郡は、八つの郷から構成されていましたが、その郷の一つに「須波郷」がありました。第三章で述べたように、「須波郷」は、塩尻から常磐城、そして諏訪形までを含み、現在の上田市西部一帯に広がっていたと考えられています。「須波」は「諏訪」に通じ、現在でもこの地域には諏訪神社が多くあります。この地域一帯が何らかの理由で諏訪大社との深い関係を有し、その結果この地域が「須波郷」とされたのかもしれません。そうだとすれば、諏訪形の諏訪神社は、奈良時代にはすでに存在していた可能性もあります。

引用が長くなるので、以下省略します。『諏訪形誌』本文をご参照ください。

今回のイベントでは時間などの都合で回れませんが、貴重な仏像のほか、武田家に関係すると思われる古笈も保管されている金窓寺をはじめ、舟窪古墳群、タタラ塚古墳、大昔の火山活動でできた岩柱等々たくさんの見所があります。『諏訪形誌web版』では「諏訪形誌を歩く」のページでは「ウォーキングマップ」で情報提供を行っています。こちらもご覧いただけたら幸いです。

また、諏訪形誌活用委員会では、地域を知り、地域の皆さんとの交流を深めていくために、年間数回（不定期）のウォーキングイベントを実施していく予定です。自治会の回覧などでお知らせしますので、ご参加ください。

お問い合わせ先
e-mail　　：suwagatashi@gmail.com